

鈴木敦子の作品を目の前にすると、家具のように自分の部屋に設えて、毎日、静かに眺めていたいと思う。日々の暮らしに通じる美意識が、驚くほど繊細にかつ親密さをもって表されているからだ。多くの作品は、雲、雨、樹木といった身近な自然がモチーフとなっているが、手の込んだ手法で描かれるのは、眼前の風景ではなく、身体に浸透している自然の記憶のようなものだ。

葉の触れ合う音が聴こえてきそうな出品作品の《橙》と《青》は、昼と夜の情景を対として描いている。一見、モチーフは平面的に単純化されているが、画面の表情は実に細やかだ。葉は一枚一枚、微妙に異なる淡い色で、支持体の麻布に浸透する水彩によって表されている。それに対し、地となる葉以外の部分は、下地にジェツソを施した上に油彩で描かれているため、マチエールが生まれている。複雑な葉の重なり具合に加え、異なる技法と質感で表現された地と図が、絵画に独特な重層性をもたらしているのである。また、それぞれの画面の下には、橙と青が線状に添えられ、色彩的なアクセントになると同時に、前者は暮れ始める夕闇の予感、後者は夜明け前の白み始める一瞬が暗示される。

このように鈴木は、詩人が言葉を綴る時のような簡潔さと注意深さでもって、自然の気配を見事に絵画的世界に転換する。そして、どこか身体的な感触を伴った心地よさが醸し出される。つまり、視覚性だけでなく、風合いを感じさせる絵画としての魅力を放っているのである。だからこそ鈴木 of 絵画は、普段着のように親密な距離で接していたいと思うのだ。

平野 到(埼玉県立近代美術館 主任学芸員)